

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02498

研究課題名(和文) ロマン派期英文学における叙事詩の様態 - スコットとホッグの詩作品を通して

研究課題名(英文) Epics in British Literature in the Romantic Period: A Study of Poetical Works by Scott and Hogg

研究代表者

吉野 由起 (Yoshino, Yuki)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：90707291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：主な成果は下記二点である。(1) Spenserが叙事詩の創作準備として執筆したThe Shepherdes CalenderとHoggのThe Shepherd's Calendarの間の深い関連性を指摘した。Spenserに倣い牧歌を経て叙事詩を創作したHoggが、西洋古典と英国文学の系譜の再編を、自身のThe Queen's Wakeによって試みたと論じた。

(2) ScottのThe Lay of the Last MinstrelとIvanhoeにおける「風景」と「森」が、叙事詩の典型的な修辞法、ビクチャレスク美学等の言説や自然環境の変化等の同時代性、の双方に関わると論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はイギリス・ロマン期文学における叙事詩の意義の再考を試み、ロマン派期に展開したジャンル実験上、叙事詩がいかなる態様でどのような役割を果たしたかを、スコットとホッグによる叙事詩様作品群を対象に検証した。自身の創作上、ジャンルへの問題意識が比較的強いとされ、複数のジャンル間を自在に横断し実験的な創作活動を行った両者がいかに同ジャンルを捉え、先行作品や同時代の言説を交錯させつつ、独自の叙事詩様作品を創造したかを考察した。両者の実験的な叙事詩様作品は、西洋古典や英国の文学の系譜を捉えなおし、同系譜上のスコットランドの位置を模索する側面を持ち、複合国家としての英国形成を理解する上でも有用であろう。

研究成果の概要(英文)：Two of the major achievements of this research are:

(1) It pointed out that Hogg's The Shepherd's Calendar echoes Edmund Spenser's The Shepherdes Calender, an eclogue written as a preparation for writing his epic The Faerie Queene. Interpreting the Spenserian epic as an attempt to rewrite and restructure the genealogy of classic and contemporary literatures, myths, and popular culture with the Elizabethan England as its central stage, it argued that by emulating Spenser in writing an eclogue before writing his epic, Hogg attempted to rewrite and restructure the genealogies of Western classics and British literature, while considering the place of Scottish literature and oral tradition in them.

(2) It argued that the motifs of landscape and woods in Scott's The Lay of the Last Minstrel and Ivanhoe echo the typical rhetoric in the genre epic while embodying his responses to the contemporary discourses of picturesque and the changes in nature and environment, which took place in his time.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：ロマン派 叙事詩 Walter Scott James Hogg ジャンル実験

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

本研究課題の研究代表者は、本研究に到る研究活動の出発点として、20世紀小説家アンジェラ・カーターが、「教養小説」という正典的ジャンルや、「民話・おとぎ話」という民衆文化の主要な表現形式の一つとされるジャンルが象徴的な例である、18～19世紀イギリス文学・言語芸術における「正典的」「伝統的」な表現様式をいかに捉えたか、という問題を検証した。カーターがいかに個別の作品の単発的な再話という次元を超えて、正典的ジャンルが体現する規範、制度や言説、さらに、言語を媒介とする人間の知覚、認識、表現の様式の「伝統」そのものを再考し、これらを批判的に再話・再構成したか、という問題の考察を試みた。この考察の結果、カーターが挑んだ「18～19世紀の正典的ジャンル」とは、そもそもいかに形成されたのか、その形成過程は決して一枚岩で固定的なものではなく、それ自体流動的ではなかったのか、という問いに至った。

エディンバラ大学に提出した博士論文(2014)では、上記の問いを発展させ、19世紀イギリス文学における妖精譚・妖精表象の特異性と変容の過程を探った。この調査では、アンドルー・ラングら後期ヴィクトリア朝期文人の著作の検証を出発点としたが、ラングの著作の調査の結果、スコットランド出身の詩人・文人たちがヴィクトリア朝期イギリスにおける妖精譚の(再)創造・受容に顕著な役割を果たしていることがわかり、さらにその系譜を辿るとウォルター・スコットに辿り着くと指摘する先行研究に接した。調査をさらに進めた結果、博士論文では、スコット、ジェイムズ・ホッグ、アンドルー・ラングを主要な研究対象とし、ロマン派期からヴィクトリア朝期に至る19世紀スコットランド文学における妖精表象や妖精にまつわる言説のダイナミズムを検証し、特に文化ナショナリズム言説・神話創造の営みという観点から作品分析を行った。なお、ヴィクトリア朝期英文学における妖精譚、幻想譚、幽霊譚は、先行研究の蓄積も豊富であり、近年も活発に研究や作品のアンソロジーの編集が行われているサブ・ジャンルであるが、対照的に、先行するロマン派期の妖精譚群は、様々なジャンルに拡散しており、より漠然と捉え難く、しばしばその重要性も看過される傾向にある。本博士論文ではこの点にも留意し、スコットとホッグの作品検証を通して、ヴィクトリア朝期妖精譚の形成の先触れとなり、モチーフやプロット等の発想に深遠な影響を及ぼしたと考えられる、ロマン派期妖精譚の意義の再考を目指し、上述の漠然と捉え難い対象の部分的な把握を目指した。

2014年から2016年に科研費の補助を受け行ったプロジェクトでは、スコットとホッグがジャンルを自在に横断して創作した妖精譚の近代性を検証した。この結果、以下の問いを着想した。前衛性に富み、ジャンル実験が展開する場ともなった両者の妖精譚は、文化ナショナリズム的色彩も帯び、スコットランドを舞台に展開する神話創造の試みであるという側面を持つが、しばしば古典的な叙事詩というジャンルを極めて強く意識している。両者による妖精譚は、後世でカーターが、先行する時代の正典的ジャンルである教養小説・おとぎ話に対して行った挑戦的な再話を彷彿とさせかねない、パロディ・借用・挑戦を、「叙事詩」という正典的ジャンルに対して、構成、モチーフ、プロット、レトリック等、作品テキストの様々な次元で行っているのではないか、という問いである。例えばホッグの *The Queen's Wake* はエドマンド・スペンサーによる叙事詩 *The Faerie Queene* に対するあからさまな挑戦、あるいは再話・再編とも読むことが可能である。

19世紀イギリスの文芸における「叙事詩」というジャンルの展開に関しては、ハーバート・T・タッカーおよびサイモン・デンティスが包括的な先行研究を行っているが、ロマン派期に「叙事詩」というジャンルを巡ってはウィリアム・ワーズワスによる *The Prelude* 等、斬新な実験作が創造されており、スコットとホッグによる叙事詩(再)創造と連動する可能性もある。

(2) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

ロマン派期英文学に展開したジャンル意識・ジャンル実験については David Duff, *Romanticism and the Uses of Genre* (2009)が重要な先行研究と位置付けられる。また、19世紀英文学史における「叙事詩」というジャンルについては、Herbert T. Tucker, *Epic: Britain's Heroic Muse 1890-1910* (2008) および Simon Dentith, *Epic and Empire in Nineteenth Century Britain* (2006)をはじめとする先行研究が存在する。

なお、スコットとホッグの作品の評価をめぐっては、特に前者は19世紀を通じて英国や広くヨーロッパの読者層を魅了し、高く評価されながらも、モダニズム期の E. M. Forster による批判以降、長期にわたり過小評価が続く傾向にあったとされる。近年再評価の機運が高まり、特にスコットランドをめぐるとの政治的な状況とも相俟って、しばしば「スコットランド文学」の正典として再認識され、活発に研究や正典化が進展している。ただし、個別の地域への執着を強く示しつつも、しばしば越境的な視座とともに、地域・領域横断的に展開していたロマン派期の文

学の潮流上に、広く英国の読者層の存在も意識しスコット語を用いつつも英語で綴られた両者の作品を位置付ける場合、両者の作品を「スコットランド文学」という区分に安易に封じ込める方法は、出版当時の両者の作品のあり方や同区分外の潮流との関連を捨象してしまう危険性も伴い、両者の作品を理解する上で諸刃の刃となりうる危険性も伴う。この点に留意したアプローチ法を取る先行研究はもちろん多く存在し、本研究でも以下の点を意識した。明らかにスコットランドを主たる関心および題材や動機としつつも、スコット語を織り交ぜつつ英語を媒体として同時代英国の読者層を意識し、時代やジャンルを自在に横断し多様な先行作品を参照するスコットおよびホッグの作品群は、ロマン派期英文学で越境的に展開したと考えられるジャンル実験、すなわち芸術・知覚・表現様式を巡る問題意識の展開とも連続・連動あるいは先行しており、両者が（複合国家としての）英国、ブリテン諸島、および、英国を超え広くヨーロッパの古典の系譜上にいかにスコットランド由来の文学を位置付けられうるかを模索した痕跡である可能性がある。この点を踏まえてイギリス・ロマン派文芸の潮流上に両者の作品を改めて位置付け、叙事詩というジャンルに焦点を当てることで、ロマン派期英文学におけるジャンル実験の実態の再検証が新たな視点から可能となり、翻って、イギリス文学における「叙事詩」というジャンルの特性の一端も、近代における複合国家の形成が必要とした新たな神話創造との関連から浮き彫りにすることが可能となる。

「ナショナル・テイル」というサブ・ジャンルの研究は、スコットの歴史小説等、散文作品を中心に活発に行われて久しいが、この文脈上に位置付けたスコットとホッグによる叙事詩様の作品研究の例は、本研究課題開始当時には比較的少なかった。本研究では、両者による叙事詩様の作品群の検証を通し、両者が紡ぎ出した「ナショナル・テイル」が従来認識されている以上に、詩や幻想文学、口承バラッド集の領域も巻き込みつつ広範囲にジャンルを横断して展開した現象であり、文学の表現様式としても実験性に富む多層的な拡がりであった点を確認することも目指した。

2. 研究の目的

本研究はロマン派期英文学において、「叙事詩」というジャンルがいかなる態様を取り、ロマン派期に展開したとされるジャンル実験の営みにおいてどのような役割を果たしたか、同時代における「叙事詩」の位置と意義、「叙事詩」を取り巻く言説の実態の一端を、ウォルター・スコットとジェイムズ・ホッグの詩を中心とする作品を対象としたケース・スタディを通して解明することを目的とした。自らが創作する作品のジャンルに対する問題意識が比較的強いとされ、複数のジャンル間を自在に横断しては実験的な創作活動を行った両者がいかに「叙事詩」というジャンルを捉え、独自の「叙事詩」という形式を創造したか、両者による叙事詩的作品が、叙事詩としてどのような特異性、もしくは前衛性を持ったか、という問題を、それがワーズワスら、同時代の詩人たちによって行われた新たな「叙事詩」創作の実験といかなる関連をしうるか、という問いも視野に入れつつ考察することを目指した。上記を通してロマン派期に「叙事詩」というジャンルが辿った軌跡の再検証を行い、同時代英文学におけるジャンル実験の実態を再考することで、従来のロマン派研究の補足を試みた。

19世紀英文学における「叙事詩」というジャンルの再創造という現象は、複雑で多岐に渡る。このため、その一端を解明するために、ケース・スタディとして、スコットとホッグの叙事詩的作品群を研究対象とし、設定、展開、モチーフ、レトリック等にもみられる叙事詩性、スペンサーらによる正典的叙事詩からの借用と逸脱の様態を検証し、さらに序文等のパラテキスト資料にもとづき、両者が「叙事詩」をいかに捉えたか、という問題を考察することを目指した。上記を通して、最終的には、イギリス・ロマン派期文学・芸術運動におけるジャンル意識や叙事詩という形式・修辭法の位置の再考も視野に入れた。

3. 研究の方法

一次資料及び二次資料の収集、分類・評価、読解分析を主要な研究方法とした。研究期間一年目にあたる2017年度に基礎的な文献リストを作成し、イギリス・ロマン派期に「叙事詩」がおかれた文学史上の文脈および最新の研究動向と知見を把握する為の予備調査を開始した。さらに先行研究の精査に着手し、ロマン派期におけるジャンル意識・ジャンル実験、「叙事詩」の定義と19世紀イギリス文学における展開と特性に関する主要論点の検討を開始した。

国内大学図書館における資料の閲覧収集は研究期間をとおして継続したが、特に前半の二年間に重点的に行った。これらの予備調査にもとづき、研究期間四年目2019年度は夏期にイギリスの大学図書館（オックスフォード大学附属ボドリアン図書館）における資料収集を集約的に行った。

年に1回は、得られた成果を学会発表で発表するか、もしくは査読付き論文にまとめ投稿することを目指した。前半2年間は学会発表を通して暫定的な成果の整理と論文の土台を作成し、後半2年間は論文執筆期間と位置付け、査読つき学術誌への投稿を行うことを当初の目標としていたが、期間中、合計4冊の共著書に寄稿することになり、シンポジウムの企画および登壇の依

頼も受けたため、予定を変更し、研究成果の発表は共著書やシンポジウムをとおして行った。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、共著書への寄稿4篇（うち1篇は2024年8月刊行予定、入稿済み）、学会口頭発表2篇、シンポジウム企画・司会2回、その他の研究会・講座等での口頭発表2回、その他依頼原稿2篇があり、具体的には以下のとおりである。

（本研究課題の直接的な成果）

(1) イギリス・ロマン期文学・芸術運動におけるジャンル意識や叙事詩という形式・修辞法の意義の再考を試み、特に叙事詩の創作に着手する前の手続きとして西洋古典の伝統上位置付けられてきた牧詩・田園詩の重要性についての再評価が必要であるとの結論に至った。David Duff (2009)、Herbert Tucker (2008)、Simon Dentith (2006)による先行研究の精査の結果、ホッグが自らの叙事詩作品を創作する際に強く意識していたと考えられるエドモンド・スペンサーの *The Shepherdes Calender* (1579)と *The Faerie Queene* (1590, 1596)、両作品のパラテキスト作品群の読解分析を進めることが不可避となり、スペンサーが叙事詩を創作するための準備として位置づけ執筆した *The Shepherdes Calender* とホッグ自身の *The Shepherd's Calendar* (1829)の間に予想以上に深い関連性があるとまず結論づけた。特に冒頭のスペンサーの筆による書簡には同時代イングランドにおける文芸や英語という言葉に関する省察が綴られ、*aeglogue* (牧歌) に関してはウェルギリウスやペトラルカ等、ローマ、イタリアの大詩人の創作活動を飾った重要なジャンルであるという議論が展開されており、ホッグ自身の文学観、言語観、創作上の美学に共鳴する部分がある可能性があると考えられる。この点を念頭におき、ホッグの叙事詩 *The Queen's Wake* の読解分析の結果を2020年5月刊行の共著書に収録された章（下記業績一覧(1)-2）にまとめ、ホッグが西洋古典および英国における叙事詩の伝統を、自身の、スコット語を織り交ぜつつ、スコットランドを舞台とする叙事詩様の作品によって再話・再編することを試み、西洋古典および英国における文学史にスコットランド由来の文学を接続することを試みた旨を指摘した。

(2) スコットの物語詩 *The Lay of the Last Minstrel* と歴史小説 *Ivanhoe* の叙事詩性を考察し、「風景」や「森」といったモチーフが、叙事詩の伝統的な構成要素や修辞法、そしてピクチャレスク美学等の言説や自然環境の変化といった同時代性、の双方に深く関わるものと位置づけた上で、*The Lay of the Last Minstrel* における「風景」と *Ivanhoe* における「森」の表象に焦点を当てて分析した。成果を2022年12月刊行の共著書に収録された章（業績(1)-3）および2023年5月開催のシンポジウムにおける口頭発表（業績(2)-2）にまとめた。

(3) スコットやホッグが叙事詩様の作品を創造する上で、バーンズの作品群を意識的に参照していることを改めて確認し、バーンズの作品群では、叙事詩の重要な構成要素である自然の描写がどのように展開しているかという問題を考察するため、ケース・スタディとして自然の事物を扱った作品数篇を分析した。この過程で、バーンズと同時代に形成が進行したピクチャレスク言説との関連に着目する必要が生じ、バーンズが同言説にいかに関与や反応を行った可能性があるかを先行研究をもとに考察した。(2)および(3)の問題意識からシンポジウム「英文学と風景」(業績(3)-1)を企画し、さらに、成果は同シンポジウムにおける口頭発表（業績(2)-2）や研究会・講座における発表・講演（業績(4)-1, 2）にまとめた。

(4) ホッグの初期の作品の軌跡と叙事詩創作への展開の考察を進め、バーンズの田園詩の影響を再確認しつつ、ホッグによる初期の田園詩集 *Scottish Pastorals* を分析した。成果は2024年8月刊行予定の共著書に収録される章（業績(1)-4）にまとめ、既に入稿を完了している。

（本研究課題の間接的・派生的な成果）

本研究課題の成果を間接的に還元した派生的な成果として、2019年開催の学会支部大会にて、「英文学と脇役」をテーマとするシンポジウムの企画を担当し、「Walter Scott, *Ivanhoe*—歴史小説と脇役」という内容を扱う研究発表を行った（業績(2)-1, (3)-1）。また2020年3月刊行の共著書に収録された論文一篇では、本研究課題の出発点となったアンジェラ・カーターによる小説 *Nights at the Circus* を、英文学史の底流をなす、ブリテン諸島に展開した妖精言説の再話として読解する試みを行った（業績(1)-1）。その他依頼原稿を2篇執筆した（業績(5)-1, 2）。

（本研究課題の成果をまとめた業績一覧）

(1) 共著書

1. 高橋和久・丹治愛編『二〇世紀「英国」小説の展開』（2020年3月、松柏社、共著、担当箇所 pp.358-382 「アンジェラ・カーター『夜ごとのサーカス』（1984）—フェアリー・テイル言説の再話」）

2. 木村正俊編『スコットランド文学の深層 場所・言語・想像力』(2020年5月、春風社、共著、担当箇所 pp.117-138 「6章 叙事詩の創造—ジェイムズ・ホッグ『女王の夜曲』と「羊飼いの暦」」)
3. 富士川義之編『自然・風土・環境の英文学』(2022年12月、金星堂、共著、担当箇所 pp.67-81 「第四章 ロマン派期スコットランドの文学と自然—ロバート・バーンズ、ウォルター・スコット、ジェイムズ・ホッグ」)
4. 木村正俊・照山顕人・米山優子編『スコットランドの詩と音楽』(2024年8月刊行予定、春風社、共著、担当箇所ページ番号未定、「詩と歌—ジェイムズ・ホッグ『スコットランドの田園詩』」)

(2) 学会口頭発表

1. 「Ivanhoe、歴史小説と脇役」(シンポジウム「英文学と〈脇役〉」、日本英文学会中部支部大会第71回大会、於 三重大学、2019年10月26日) [単独]
2. 「〈田園詩〉と〈叙事詩〉の再創造——Robert Burns と Walter Scott の詩作品における風景」(シンポジウム「英文学と風景」、日本英文学会全国大会第95回大会、於 関東学院大学横浜・関内キャンパス、2023年5月20日) [単独]

(3) シンポジウム企画・司会

1. シンポジウム「英文学と〈脇役〉」、日本英文学会中部支部大会第71回大会、於 三重大学、2019年10月26日
2. シンポジウム「英文学と風景」、日本英文学会第95回全国大会シンポジウム第二部門、於 関東学院大学横浜関内キャンパス、2023年5月20日

(4) その他、研究会・講座等での口頭発表・講演

1. 「第41回(2023年度)イギリス・ロマン派講座 スコットランドの詩と自然—ロバート・バーンズとジェイムズ・ホッグ」(イギリス・ロマン派学会主催、於 日本女子大学目白キャンパス、2023年7月1日) [単独]
2. 「ロマン派期スコットランド文学と自然」、日本ケルト学会東京研究会、於 慶応義塾大学日吉キャンパス、2023年7月15日[単独、依頼による講演]

(5) その他依頼原稿

1. 「ジェイムズ・ホッグの『夏の夜の夢』」『日本カレドニア学会 Newsletter』71号(日本カレドニア学会、2021年7月): 2. [単著]
2. 変わりゆく時代と風景の再創造『週刊読書人』第3488号(2023年5月12日) (「特集 英米文学/研究書のススメ 日本英文学会全国大会開催を機に」内『私の研究テーマを紹介します』): 7. [単著]

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉野 由起	4. 巻 -
2. 論文標題 「第6章 叙事詩の創造 ジェイムズ・ホッグ『女王の夜曲』と「羊飼いの暦」」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 木村正俊編『スコットランド文学の深層 場所・言語・想像力』	6. 最初と最後の頁 117-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野 由起	4. 巻 -
2. 論文標題 「アンジェラ・カーター『夜ごとのサーカス』（1984）- フェアリー・テイル言説の再話」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高橋和久・丹治愛編『二〇世紀「英国」小説の展開』	6. 最初と最後の頁 358-382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野由起	4. 巻 -
2. 論文標題 「第四章 ロマン派期スコットランドの文学と自然 ロバート・バーンズ、ウォルター・スコット、ジェイムズ・ホッグ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富士川義之編『自然・風土・環境の英文学』	6. 最初と最後の頁 67- 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉野由起
2. 発表標題 「 田園詩 と 叙事詩 の再創造 Robert BurnsとWalter Scottの詩作品における風景」
3. 学会等名 日本英文学会第95回全国大会 シンポジウム第2部門「英文学と風景」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉野 由起
2. 発表標題 「スコット『アイヴァンホー』 歴史小説と 脇役 」
3. 学会等名 第71回日本英文学会中部支部大会 シンポジウム「英文学と 脇役 」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 富士川義之編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 464
3. 書名 自然・風土・環境の英文学（担当：第4章(pp.67-81)「ロマン派期スコットランドの文学と自然 ロバート・バーンズ、ウォルター・スコット、ジェイムズ・ホッグ」）	

1. 著者名 高橋和久、丹治愛編、吉野由起 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 460
3. 書名 『二〇世紀「英国」小説の展開』	

1. 著者名 木村正俊編、吉野由起 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 430
3. 書名 『スコットランド文学の深層 場所・言語・想像力』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(シンポジウム企画・司会)
1. シンポジウム「英文学と 脇役」、日本英文学会中部支部大会第71回大会、於 三重大学、2019年10月26日
2. シンポジウム「英文学と風景」、日本英文学会第95回全国大会シンポジウム第二部門、於 関東学院大学横浜関内キャンパス、2023年5月20日

(研究会・講座での発表・講演)
1. 「第41回(2023年度)イギリス・ロマン派講座 スコットランドの詩と自然 ロバート・バーンズとジェイムズ・ホッグ」(イギリス・ロマン派学会主催、於日本女子大学目白キャンパス、2023年7月1日) [単独]
2. 「ロマン派期スコットランド文学と自然」、日本ケルト学会東京研究会、於 慶応義塾大学日吉キャンパス、2023年7月15日 [単独、依頼による講演]

(その他依頼原稿)
1. 「ジェイムズ・ホッグの『夏の夜の夢』」『日本カレドニア学会Newsletter』71号(日本カレドニア学会、2021年7月): 2. [単著]

2. 『週刊読書人』「英米文学 / 研究書のススメ 2023」(2023年5月12日、第3488号)
https://jinnet.dokushojin.com/blogs/news/elsj2023_veiw

(既に入稿を完了し、近日刊行予定の共著書)
1. 木村正俊・照山顕人・米山優子編『スコットランドの詩と音楽』(2024年8月刊行予定、春風社、共著、担当箇所「詩と歌 ジェイムズ・ホッグ『スコットランドの田舎詩』」)

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------